（第三種郵便物認可 大正十四年十一月廿日）　大正十五年十一月五日　立教大學新聞　（金曜日）　第四十五號　（一）

立教大學新聞

旬刊
發行日 五日・十五日・廿五日
本紙定價 一部 金五錢 一年 壹圓五拾錢
廣告料 五號活字十五字詰 一行金五拾錢 場所指定貳割增
發行兼編輯印刷人 玉井俊夫
東京市外池袋立教大學構內
發行所 立教大學新聞學會
電話小石川四〇九番
振替東京七〇八五二番

本書を讀まずして文壇のことを語る勿れ！

文壇太平記

▽四六判三百五十頁上製 定價一圓六十錢 送料十錢

文壇の某消息通、こゝに相馬健作なるペンネームに隱れて現文壇の裏おもてを其儘明るみへとさらけ出し文士生活の內面的解剖より奇怪なる作品生產商取引の關係に及び一々實例を擧げて縱橫の一筆を揮ふ。朋黨的職業文壇これによりて始て震撼し飴細工文士共色を失はん。

見よ、文藝の民衆的奪還の日は來れり。文壇人もこれを讀め、非文壇人も讀め！

澎湃たる賣行！

初版正に盡きんとす！

今スグ本屋へ！

東京神田淡路町二 振替東京五二九七 萬生閣

法律辭書

渡部萬藏著

◇裝幀 脊革布製金具附、全く類例無き新考案に依る耐久力無比の裝幀也。

◇紙數 大判壹千四百頁、總六號四段組、壹頁字數二千五百、紙質優良、外に書畫拾貳葉入。

◇內容 著者の舊著法律大辭典（明治四十年初刊）は標題の語數四千也しが本書の標題は壹萬參千 獨英佛伊羅の五國語對照、本年四月末日迄の法令及事實を網羅す。

◇分類 標題の分類は現行法約壹萬、書式參百貳拾、內外の法學者法官小傳八百法制史七百、國際法外交事項參百五拾等。（參考其他の文獻を示すと貳千餘種約參萬册）。

◇特色 說明の重複を避け相參照する方法を採りたるが故に、普通の說明の數千頁と同一內容を有す、又ルース・リーフ式にして今後僅少の費用を以て加除訂正を爲すを得べし。

◇規約 製本既成、即時送本、申込次第內容見本無代進呈。定價拾八圓、送料五拾四錢、（但市內拾貳錢、臺、樺、鮮、支、八拾五錢）。

發行所 法律辭書刊行會
東京市神田區錦町一の一〇（電話神田三四二八番） 振替東京九三九番

報知新聞記者 黑木勇吉氏著

新聞十字街

◇四六判二六〇頁 假裝全一冊 ◇定價金一圓 送料八錢

—經濟學博士太田正孝先生—曰く

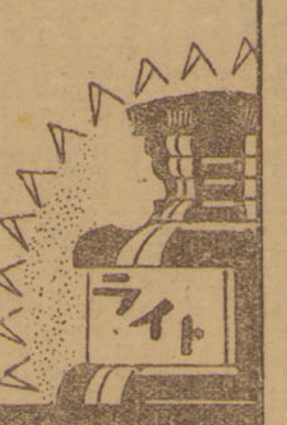
本書は新聞を知り、ほんとうに新聞を理解しようとする人にとつては、一目でわかる新聞全體の輪郭である。新聞讀本である。

新聞記者にとつても研究材料としてのよい參考書であり、殊に新聞記者を志す青年學生には無二の生きた教科書である。（序より）

發兌 東京小石川區豐川町 振替東京六七一四六 武藏野書院
發賣 東京神田錦町一丁目 振替東京五八七八二 文修堂

新涼の秋
ライトに依りて
學業に 事務に 能率百倍

ライトインキ



宮內省御用達
チャムピオンインキ本舗
篠崎インキ製造株式會社
東京・大阪・長岡

告學會員

本紙發刊の後、緊急問題協議の爲め臨時總會を學會事務所に於て開きますから全員洩れなく御出席下さい。

拾一月拾日（水日）午後一時より

立教大學新聞學會

スペングラー著 村松正俊譯

西洋の没落

第二分册出づ！

本書は廿世紀が生める世界最高最大最新の名著として定評がある。十八世紀はカント、十九世紀はマルクス、廿世紀はスペングラーの時代であるといはれるのである。世界の學者思想家にして本書についての研究批評を發表せる者既に四百名に達し、世界の思想界にセンセーションを起せる事の大なる未だ斯の如きは無い。獨逸原著は既に十万を盡くし、世界各國爭つて本書を譯す。今や邦譯は其第二分册成り、世界史の問題より入りて宇宙の問題に突入す。實に哲學の根本問題を捕へて縱橫無盡、カント以來の大學派哲學を亞然たらしめたのである。哲學、思想、世界、科學、現代、歷史を學ばんとする者は先づ本書を讀め！

（第一分册定價貳圓 第二分册定價貳圓）批評社發行

室伏高信著

新秋讀書期を迎へて本社は「文明の没落」を著して以來既に七万の讀者を有する室伏高信の新著を茲に新に增刷して讀書子の机上にすゝめる事を喜びとする。片々たる諸雜誌、講壇諸生のくり言に厭ける人々よ、來りて無限の靈、新しき曙に接せよ

書名	版	定價	送料
文明の没落	第五十二版出來	壹圓八十錢	十八錢
土に還る	一万一千部出來	壹圓六十錢	十八錢
日本論	第一万部出來	壹圓八十錢	十八錢
女性の創造	第八版	壹圓六十錢	十八錢
自由人は斯く語る	第十版	貳圓	二十錢
社會主義批評	最新刊	壹圓六十錢	十八錢
共產主義批評	最新刊	壹圓六十錢	十八錢
新しき時代とは何乎	最新刊	壹圓八十錢	十八錢

發行所 東京・大森 振替東京四五三四六 批評社（稲門堂書店に取そろへてあります）

巖松堂書店出版書 東京神田中猿樂町 振替東京六五五六

巖松堂書店編輯部編

出版関係法令集（新刊）

四六判函入 紙數一三〇頁 定價金壹圓 送料金十二錢

本書は（一）著者權法（二）出版法（三）新聞紙法（四）教科書認定規則等の諸法と、之に附屬の關係法規を悉く網羅したるものにして、尚五十一議會に提出せられたる出版物法案の全文をも附錄す。著作及出版に關係を有する士の必備必讀の良書なり。

法學士 宇賀價三著

出版物法論

定價 三・五〇 送料 ・一八

東京朝日新聞記者 棟尾松治著

米國新聞業の研究（新刊）

四六判布裝函入 紙數三六八頁 定價金二圓五十錢 送料十二錢

米國は新聞王國である。其の組織の大規模なる點に於て、資本の豐富なる點に於て、ニウース及フイチュアの供給機關の完備せる點に於て、且つ新聞廣告の盛んなる點に於て世界無比である。著者は米國新聞學校の權威ミゾリー大學に於て、ジャーナリズムを専攻した人。本書は先づ新聞の本體を闡明して購讀者との關係を說き次で其の史的發展を概說し、更に米國新聞の發達を詳敍し、現代新聞の經營と分布對立競爭の情況を記すること明細を極む。我邦新聞業が月に歲に態々米國化するの情勢顯著なる今日に於て此書が必讀の要書たること勿論である

早大講師 松宮三郎著

廣告學概論（新刊）

菊判總布裝幀 紙數三二〇頁 定價金參圓 送料十八錢

商業界に於ける廣告の位置は販賣能率の第一要因なり。本書は本邦廣告の重鎭たる東京三越吳服店廣告部長、松宮氏が其の該博なる知識と豐富なる經驗とにより內外の學理の實際とを參酌し、斯學の要綱を思想的に闡明したるものにして、廣告の起源、變遷及現代廣告界の情勢を簡明に敍述して縱橫自在に剴切なる批判を加へ、將來の廣告の改善進步さるべき方途を示されたり。商業家、廣告關係者及斯學研究者にとり精確なる羅針盤たらむ。

早大教授 北澤新次郎著

勞働經濟論（六版）

菊判布裝函入 紙數三九六頁 定價金參圓參拾錢 送料十八錢

勞働問題は年を逐ふて急進的に變化し來り今や勞資の對立となつて重大なる社會問題の焦點となるに至つた。本書は該問題に對し頗る熱心な研究家として識られたる著者が、該博なる薀蓄を傾注して其の要綱を捉へ、學理と實際との兩方面より明快なる解說を下し、各種の主義思想に對し縱橫の批判を加へられたもので、學界業界にある者の好指針である。

農學博士 小野武夫著

德川時代の農家經濟（新刊）

四六判函入 紙數二〇二頁 定價金壹圓五拾錢 送料十二錢

著者は農民經濟史の眞摯なる研究家として世間既に定評ある篤學の士なり。本書は德川時代の農家經濟に關し全國各地より幾多の貴重なる參考資料を參酌し之を著者獨自の體系に論組したるものにして（一）土地及米の値段（二）米の收量と地主小作の分配（三）百姓の生活狀態（四）農業經濟狀態（五）農家經濟の今昔等を收む。日本固有の村落文化の跡を窺知するに好適の書なり。

著者	書名	定價	送料
農學博士 小野武夫著	農民經濟史研究	四・五〇	・一八
胡適氏著 楊祥蔭 內田繁隆譯	支那古代思想の新研究	一・五〇	・〇八
早大教授 大山郁夫著	民族鬪爭と階級意識	・七〇	・〇六

時事新報社經濟部編

財づる物語

四六判上製 美本函入 五百六十頁 定價二圓五拾錢 送料十六錢

▲本書登載の財界名士六百餘名（名士の寫眞百三十有餘）

□財界の心臟として、打出の小槌を振ふ日銀の身代が、開業當初の二千三百餘萬圓から、最近には二十二、三億圓に膨脹したとか、銀行會社の資本總額が、二千五百萬圓（明治十年）から百六十二億圓になつたとか、或は又貿易總額が、二千六百萬圓（明治元年）から四十八億七千八百萬圓（大正十四年）に增したとか云ふ、我が財界大發展の數的アウトラインを示すものは、資料として又研究書として限りなくあるが、さてその中に活躍せる舊人物活人物の傳記は殆んど缺けてゐる。例へば、三井三菱が十億の巨富を何人に依つて如何にして積まれ、現在何人に依つて動かされ、また、日銀、正金等から各方面に放出した人材が如何なる活躍をなしつゝあるか、或は又二十萬圓の資本から三億五千萬の大をなすに至つた東京電燈、其他澁澤、安田、大倉、淺野等を今日あるに至らしめた人と人、更に又財界に居然として對峙せる團體と團體、凡そ此等の關係脈絡、換言すれば財界を動かした人物活躍の機微に就て調査評論したものはない。

內容概目

▽打出の小槌を振ふ日銀の面々
▽行員上りで固めた正金銀行
▽三井財閥の沿革と人物
▽甲州系財閥と其人物
▽事業王大倉と其事業
▽電界の爭覇と福澤王國
▽日銀から巣立つた人々
▽正金畑から鮮銀と臺銀へ
▽三菱財閥の事業と勢力
▽銀行王安田と其功績
▽大御所澁澤と其事業
▽飛將軍淺野と其事業

□本書は此の立場に於て、現代の財界がいかなる人物によつて支配せられてゐるかを洗練された文章に諷刺諧謔の妙を以て綴つた現代經濟界の人的鳥瞰圖又は貨殖列傳として空前の快著‼本年一月以來時事新報紙上に連載して大好評を博した讀物である。

新刊

日本工業俱樂部調査課長法學士 森田良雄著

我國の資本家團体

四六判布裝函入 三百四十頁 定價貳圓（送料十錢）

□勞働と資本との對立鬪爭は、現代社會の避くべからざる事實であり、又社會問題の焦點をなすものである。勞働組合が資本主義經濟社會に於て當然生るべき必然性を有つと同樣に、資本家、雇傭主階級の側に於ても亦、之れに對抗する團結の生れるのは免れ難い勢である。

內容目次

○資本家團體の意義及範圍
○資本家團體の發達と其の現狀：明治政府の產業政策：法的團體の發達：任意的團體の成長
○資本家團體の事業及施設：勞働問題に關する調査研究：提案答申：災害防止施設：溫情主義的施設
○資本家團體の勞働政策：勞働者の爭議防止：特定勞働者の雇入排斥：團體交涉：團體交涉の拒否
○資本家團體の法律上の地位：序說：資本家團體と勞働立法：勞働法案に對する態度：國際勞働會議參與：資本家團體と政治行動：資本家團體と勞資協調
○小作爭議と地主組合：地主組合の發生：地主組合の名稱目的及組織：地主組合の事業及對策
○附錄：主要資本家團體一覽：定款及規約

□本書は著者が、日本工業俱樂部の調査室に籠つて、多年我國の資本家團體に就いて研究したる處を纏めた、全日本の資本家團體の陣容を示したものである。今や我國は言論界といはず、政界といはず、社會の各方面に於て反資本主義的勢力が濃厚ならんとしつゝある反面に於て、資本家聯盟の急を高唱する者すらある狀勢となつてゐる際本書は實に、勞資兩方面に立てる人々は勿論、政治家學者學生並びに社會各方面の士の一讀すべき好參考書たるを疑はぬ。

東洋經濟研究部編纂

明治大正 農村經濟の變遷

四六判上製函入四八〇頁 定價貳圓七拾錢 送料十四錢

新刊

從來、我國經濟全體の上から、我が農村の位地を眺め、はた、明治維新以來のその變遷を調査研究したものは殆んどない。實際我國の農村經濟は、維新以來の六十年間に、非常に興味多き變遷を遂げてゐる。また時勢に驅られて、その改造の端緒が、顯然として開かれつゝある機運に臨んで居る。而してこれは、我國經濟全體の關係から眺められてのみ、始めてその意味が求められ、その眞相をつかみ得る問題である。

▲本書は、此の立場に於て、高橋龜吉氏が主査となり、年餘の日子を費やせる一大文獻。敢て江湖の一讀を薦む。

內容概目

△維新後の農業發展と其原因—地主の解放と農業經濟の發展—農業發展の樣式
△日露戰後の農村經濟の停頓と其原因—我が經濟の資本主義化と農村—地主の機能喪失—農村政策の錯誤
△歐洲戰後の農村經濟の行詰—戰爭に由る不自然なる農村の繁榮と其反動—戰後の耕作單本位農業の行詰とその對策としての自滅的現象—小作料還元運動の勃興—副業の本業化と機械化—農業方法の變化
△我が農村經濟改造の方向—耕作中心農業の行詰と其轉換—交換經濟の發達と農村經濟の對抗—農村振興策としての交易組織の改造

附錄—農業年表、農業關係重要資料法規並に諸統計百六十餘頁

東京牛込天神町六 振替東京六六五一八

東洋經濟新報社

論說

科學に於ける社會學の地位

社會學とは社會を對象とする科學である社會とは即ち人間結合の形式を云ふのである

諸種の社會科學（政治、經濟、法律學等）は社會的實在或は社會生活の特殊の一方面を考察するに反して社會學は其全體を包括的に考察する從つて此考察方法又は認識目的より云へば自然科學的のものであると見られるが社會學の概念の特長はこれのみでなくその包括性にも存するのである

社會科學の中に於て當爲の色彩より脫脚して事實を事實として見ると云ふ態度の最も明確なるものは社會學に若くものはない

社會學は即ち社會的實在を包括的に考察する、之に二種の意義がある（一）內包的包括──具體的普遍（二）外延的包括──抽象的普遍である

內包的包括とは他の社會科學が一々の文化の種類又は社會現象を取扱ふに對して社會學は此の總體を包括的に考察して社會生活の諸方面は渾然たる一體を形成するが故に他の社會科學が一面的考察をなすに反して社會學は全體に着眼して諸種の社會現象を研究するのである

外延的包括の意味は經濟、宗敎の如き社會現象を社會學は考察の對象するのであつて之等の經濟宗敎の如きは社會現象を通じて存在する本質を取扱ふが故に社會現象の總てはその範圍に落ち來るのである換言すれば社會的生活の包括考察である、此の特徵は社會諸現象の基本であるが故に前述の內包的包括よりも一段高き意味を持つのである

以上の如く社會學は倫理的必然なる結合に依つて自然科學的にならざるを得ないのである

社會學發達史上に於て社會學者の主たるもの丶研究方法は一にこの自然科學的法則の探求に在つたのである

即ち普遍妥當性を有する自然法則を求むる所に存して、これ以外の他の方法が他の學との混同を引起す、最も大なる點であつたのである

以上の如く社會學は他の社會科學のいづれよりも包括性の大なる所にあつてMacIverマクイバーの如きはその社會學（Community）の中に於て社會的事實の特殊の種類を取扱ふ社會科學は全體として社會の學たる社會學ほど一般的學問ではない、社會科學が社會學內に其範圍を持つことは組合が社會內に其範圍を持つ樣なもので社會科學は生命の結合樣式の學であつて社會學に殘された主位を占める資格はないと云つてゐる

社會學の研究對象は社會であるが、故に社會學は社會共同生活內の一面相として他の社會科學を考察するのであつて斯如き綜合的研究の必要が社會學の發生の主因である

而して玆に最も議論の生ずる點は社會學が如何なる法則に依つて生きるかの點であつて、種々の論爭は或は社會學を以て自然科學の一であるとなし他は文化科學であると爲すのであるが鈴木宗忠博士は社會學を以て自然科學であるとあるも他の社會科學は文化科學でありとして『學問論上より見て個人の心作用其物の一般的法則を研究するのが心理學であつて心作用の結合の一般的法を研究するのが社會學である故に心理學も社會學も亦自然科學なりとしてゐるのである、此の論據は、心作用の單獨なるもの即心理學も又結合するもの即社會學も別問題象論の上より見れば時間に依つて變化すること無く幾度も同一事が繰返されるが故に自然である（社會哲學の諸問題百五頁より）又米田庄太郎博士はその中間說をとり高田保馬博士は社會學を以て普遍化的文化科學となし社會學が心理學、生物學等に吸收されずして獨立なる存在を保ち社會的なるもの丶科學たるかぎりそれは自然科學たる事能はず普遍化的科學ではあるが文化を取扱ふものと、認めると論じてゐる（社會學概論第一章）

要するに高田博壯の見解は從來の方法論の何れにも滿足しなかつた所より發したものと思はれるのであるが矢張り所謂文化的見地よりで見ても社會學は自然科學と認める方が順當であると思はれる

而して社會學研究は社會の分析の如き事のみに於ては滿足する事が出來ないのであつて、斯如き斷片的なものでない所の社會に對する構成的な研究が試みられねばならない、即ち社會を構成的に研究するためには社會に對して構成的な見地に立つて社會の總ての方面を包括的に研究する統一的立場に立つ必要がある

電車の坐席の分配

敎授　竹村豐太郎

◇

電車ではじめのうちは空の座席に人が乘る、人が乘る、人が乘る。座席がだん／＼ふさがつて行く。その中に下りる人もある。もしもこの下りる人よりも乘る人の方が多い場合の電車を想像して見るならば、やがては一の空席もなくなる時が來る筈である。電車は驛から驛へ走つて行く。その時に一人の男が乘つたと假定せよ。或はその時一人の乘客が下りて二人が乘つたとして二人のうちの一人が自然の勝利か詐術か暴力にで早く乘つた爲めにその空いた一人分の空席を占領しただけであると假定せよ。前の場合ならば壓に彼、後の場合ならば壓されたる一人は、一わたり車內を見渡す。そして全くこの席がふさがつてることを見出す。彼はそこで年の寄の踏臺のやうに突立ちながら下るか車內の一隅にでもからだを立て掛けて我慢するより外に仕方がないであらう。かくしてプロレタリヤ、座席の占領に後れ・從つて座席權を持たない最初のプロレタリヤが現れる。◇

もしも彼が近世に屬しないならば座席に居る人達は生れつきから坐るやうに出來て居、自分は飴か張り板のやうにして居るものであると考へるであらう。それが神の聖旨であつて飴や張り板の生活も亦祝福であり來世への喜ばしき準備であるとのお說敎がありがたく耳に入るであらう。

しかし、もしも彼が近世に屬してるなら事態は大いに異る。──同じやうに賃錢を支拂つてしかもあるものは安樂に座し他のものはぶら下り或は立てかけられるのは果して正しくあるか。しかも少くとも坐してる人達の半分は一乘車數にしか當らない定期乘車券のお客であるのに立つてるものがまともに十錢拂つてるとすれば猶以て腹の虫が納まらないではないか。切符を買つてしまつたんだから下りるわけに行かないけれど然しつく／＼坐つてる奴等の顏が氣にくわない。人々は乘るばかり。プロレタリヤは增すばかり。◇

プロレタリヤがこんなことを考へてるのを知らないでか、坐つてるブルジョアは伸び／＼とうしろへそり返つて愉快さうに新聞を讀んでる。碌な氣味はしないであらう。どうしても泥棒面である。そうだマルクスは彼等は皆掠奪者だつて云つた。誰から掠奪した？プロレタリヤから、俺達から。

ところが彼等の席を奪還しやうと思つても經濟行爲的手段に訴へるべくプロレタリヤは立ちづめであるためあまりに疲れ果ててしまつてるのである。そこで唯一の方法暴力詐術を行へば法律は直に壓迫して詐僞秩序紊亂として彼等を下してしまふ。車掌と驛夫がブルジョアとぐるになつてる。もう絕體絕命だ。現社會制度の顚覆！ついでに胴體の太さを半分にすれば倍の人數が坐れると云ふものだ。◇

だがそれは出來ない。一體ブルジョアが掠奪者だと云ふが空席に坐つたのが何で掠奪者だ。誰から掠奪したか。ブルジョアは早く乘り、プロレタリヤは後から乘つただけのことである、第一席がなくなつたのにどや／＼乘つてくるのが惡いよ──とマルサスが云ふ。

いや、人々が乘車するのは用があるので避け得ない。それを咎めるのは慘酷だ。第一、坐つてる連中が呼び込むではないか──とマルクスが云ふ。◇

この騷ぎの間に大井の電車工場では車體製作數を增して行くであらうけれども、誰でもが安樂に坐らうとするには車內でお互が席を讓り合ふのは當然であるとして結局は帝劇や上野の圖書館のやうに現在ある座席數だけの切符を發賣するより外はないであらう、分配の問題は分配の人數が無限にふえてははてしがない。それでもきかないお客には『生活力なき所に生存權なし』とのマルサスの言葉を見せるがいゝ。（一五、十一、三）

【寫眞說明】第三回神宮競技に見事優勝した本學籠球チーム（上）同じく柔道青年組決勝戰に惜敗した本學山本四段（下）

鐘發刊遲延の辯

藤井隆太郎

立敎大學文學部をバックとする文藝學術雜誌を發行したいことは我々校友有志が抱く多年の切望であつた。それは大學當局が文學部の存在の如何なる根本方針を以て維持せられてゐるかは論外に置くとして、我々どうしやうもない文藝愛好者──之は廣い意味に於てよある──に取つては餘りに滿たされぬ心許りであつた。中にも我々の藝術心境を何處に發表しやうもない情なさと、其藝術心境をより更にアッピールして與れる先輩のないことは、誠にどうしやうもない心の空虛であつた。素より我々の時代は創立間もないことであり或意味に於てはさう言ふ方が無理であつたかも知れぬが、それから十有餘年成長文學部は相當發展もするし、又學生諸君は文藝雜誌を發行したり劇や映畫の研究會を起されるし、當時に比較しては お話にならぬ進步の跡を辿ることが出來やうけれども、上に言つた二つの不滿は依然として今日も殘されてゐる大きな問題であらうと思ふもう思想界、文藝界の主潮に活躍しても惡くない頃ではないか、否新人は大にある、少くとも私はさう確言するに躊躇する必要を認めない。それは文壇に少し氣を付けたら分る問題であらう。

──（一）──

さう言ふと何を生意氣な、と中には一喝を喰はす人があるかも知れぬが、一喝だけで此理由が解けるなら、私はいつでも私の不服氣なツラを突き出して結構である。私などは徹頭徹底總ての力も持てぬが、校友有志中には已にして色々な意味から同樣の意見を有たれ進んで學生諸君と協力して文學部を中心とする一の文化運動を起したらどうか、此意見の一致した結果が雜誌『鐘』の發刊に具體化されやうとしてゐるのである。が此計畫は、昨年十一月の會合以來早晚くとも本年四月から實現する運びであつたが、色々な事情で、それが五月に變更され、六七八の夏季は論外として、九十兩月が又延期された。そして漸く十一月號を以て諸君の批評を聞き得る運びとなり、既に十月中旬印刷所に原稿を廻付したのであるが筆紙にも盡くされぬ無法の延引を敢てされた爲に又復延引したのであるが、今日までの遲延の責任は一にかゝつて私にあるので、他の同人諸君並に此計畫を後援せらる、先輩に對し、便宜上今まで其衝に當つてゐた私として、一通りでは申開きが出來ぬ程である。

──○──

併し一切の準備は既に整つてゐるし、印刷所の爲に聊か出鼻を碎かれた氣味はあるが、遠からず創刊號から引續き每月發行する決心であるから、學生諸君も事情諒とし、進んで御後援をして頂くと共に、ドシ／＼御投稿を願つて、目的の貫徹に協力したいと思ふ。尚編輯方針は主として同人井口正名氏が當られる筈であるが、創刊號の重なる內容は左記の通りである

▲新たに生れ出づるもの丶意義田中王堂 ▲文學と語學との關係岡倉由三郎 ▲批評家メンケン杉田未來 ▲文學と語學石川錬次 ▲映畫藝術に就て永野毅 ▲完紗記宮原民平譯 ▲青蛙に（詩）木內打魚 ▲夫婦と岩（創作）坪田讓次 ▲或る牧師の苦笑（劇作）渡邊正知 ▲妹の手紙（創作）井口正名 ▲其他

籠球決勝

接戰に接戰を重ね本學再び優勝

早大の肉薄も空し

於明治神宮競技籠球大會

昨年早大に覇を奪はれて武運拙くも其の榮をかち得なかつた本學バスケットボール部は本年第三回明治神宮體育大會にて連日外苑競技場に活躍し中二回戰に第八高等學校を第三回戰に水戶高等學校を一蹴して三日優勝戰に早大と對戰し遂に之を破りて再び榮ある明治神宮體育大會に優勝すること丶なつた、大會に於ける記錄は左の通り

◇第一回戰　不戰一勝

◇第二回戰　立敎大學14──11八高　一日午後二時より開始審判淺野田中兩氏

◇準決勝戰　立敎大學65──11水戶高校　二日午後三時四十五分開始審判森田加納兩氏

本學は得意のコンビネーションで前半38對3後半選手全部入れ變りて27對8で樂に勝つ

FG	FT	F	水高	
4	3	3	奧山	F
0	1	0	山口	
0	0	2	高島	C
0	0	2	大島	G
0	0	1	太田	
2	1	4	前半	
8	0	4	後半	
10	1	8	合計	

立敎		F	FT	FG
野村	F	6	3	14
山田		0	2	12
淸水		0	0	10
劍持		0	0	4
東城	C	0	0	18
島居	G	0	0	0
內田		1	1	0
松崎		0	0	0
佐藤		1	0	0
中澤		0	1	0
前半		2	4	34
後半		0	3	24
合計		2	7	58

◇優勝戰

本學20──18早稻田大學

本學は關東第一區代表にして早大も同じく一區代表である

◎前半二分佐藤のフリースローと東城のゴールで三點を擧げ優勢を示したが早大もさるもの六分早川續て鈴木シュートし接戰となつたが本學の連絡頗る好く頑強なる早大のファイブメンディフエンスをしば／＼破りて淸水、野村、淸水と得點を加へ其の後早大も頑張つて三點を返へしたが及ばず10──7で本學リードしてハーフタイムとなる

◎後半本學依然優勢で常に巧みなるショートパスで攻めて16──9とリードする。早大却つて本學のファイヴメンディフエンスに亂されて無謀なるロングシュートを行つたがフリースローを物にして着々點差を縮めタイムアップ前本學の疲勞に乘じて最後の頑張りを見せ鈴木の奮鬪にゴールし本學も東城二つのシュートに四點を加へ20──14となる早大最後に稻垣、李のゴールで20──18と肉迫したが本學好くさゝへてタイムアップとなり第三回明治明宮體育大會の榮ある選手權を掌握した。

FG	FT	F	早大	
6	2	2	鈴木	F
2	0	0	早川	
0	0	1	黒澤	C
0	1	1	稻垣	G
4	1	2	李	
0	0	2	富岡	
2	0	1	富田	
6	1	2	前半	
8	3	7	後半	
14	4	9	合計	

立敎		F	FT	FG
野村	F	2	0	6
淸水		0	1	4
東城	C	2	0	8
佐藤	G	2	1	0
內田		4	0	0
中澤		0	0	0
前半		2	2	8
後半		8	0	10
合計		10	2	18

山椒より南蠻へ

十一字詰六十行以內記名のもの丶み揭載但し紙上匿名可

山椒は小粒でもピリッと辛いと云つたつて小粒の連中よ、自惚れちやいけない、ピリッと辛いと云ふのは小粒の體軀に似合はぬ辛さがあると云ふ程度の意味である。

一粒の山椒に顏を顰めて洟す涙の量より、赤南蠻を食つて絞り出される涙の量が多いのは當り前ぢやないか、今一度申し渡して置く。小粒の蜚よ自惚れるぢやないと。

『立敎大學』と云ふ言葉を見たり聞いたりする每に何處かヒヤリとする處がある、敢て大學の大の字は校舍壯大の大の字だと云ふのでもなければ、學生數の多大の大の字だと云ふのでもない、併しヤッパリ大學の大の字から『おほきい』と云ふ意味を除いて終ふ譯にはいけない。

さて、一粒の山椒が立敎大學だとマア斯ふ前提してから話し出す事にする、學生數無慮六百、正に矮小そのものであらふこれを以つて立敎大學は山椒だと云ふのである、勿論立敎大學が山椒たと云ふ事を誇か、唯一の特點とでも考へてゐるんには別問題であるが吾輩はそんな良い氣持ちで滿足しちやいられない。

立敎は何處と無く氣持ちの良い、偉い所のある大學だ、よくこんな少數の學生數で他の大學と步調を共にして行けると、今更驚く位である、六百人から選り拔いて野球に籠球に、角力に、蹴球に等々に、實際泪ぐましい程堂々と他外的に氣を吐いてゐる。

山椒は小粒でも辛いなあと、思ふ事が度々あるだが／＼此處だ、忘れて貰ひ度く無いのは此處である、山椒の辛ひのは、それ相當以上の辛さがあると云ふに過ぎない、南蠻はヤッパリ南蠻だけ辛い。山椒の辛さ位、鼻をつまんで食へば大した事は無い。

──◇──

立敎は學生少數主義だと妙な固執を捨てたいものだ。山椒の辛さは誠に結構である、併し、併し山椒の小粒に甘んじちや困る『柔弱なる風態は立敎精神を云々』その立敎精神なるものが山椒の小粒を以つて特長とする事にいさゝかでも關係してゐるのであつたなら、止めてもらはふ、つまり吾輩の言はんとする處は山椒の辛さを更に南蠻の辛さに移轉せねば大學の字の意義が一寸妙だと云ふのである。

──◇──

それから立敎大學の同輩學生諸君に。吾々は立敎大學の學生である、立敎は吾々の母胎である、つまらぬ泣き言は止めて奮して、山椒の小粒に滿足せず、山椒の小粒の辛ちを更に辛らからしめんとすると同時に、一日も早く、あの赤い、眞紅な大南蠻の辛さに仕樣ではないか。

神宮競技の槍投に三等を得

岡田重一君の活躍や目覺し

既報の如く東奧羽の競技豫選にパスして榮ある明治神宮體育大會に出場した本學競技部員の岡田重一君は槍投に於て四十九米を出して斯界强敵の高師の尾崎を破りて第三位を得た。同じく豫選にてパスした坂木君は明治神宮大會のホスジャンプに於て第七等を得た。之は本學の新記錄である

露領浦鹽と北滿紀行（二）

淸水力松

レニンスカヤからペキンスカヤへぬけ坂をドらんとする處にレニンの勞農學校がある、ゴシックの四階で豪奘なビュルデングである。その向へ側には佛人經營で有名なクンストアリベルス商會、チ丶リン商會が美しく飾つて居る。ショーウインドには珍らしい頭冠切やルバンカの新物などが並べてあつた。國營商店としてはコストルグなどがある。ウラジオ市街は山の手に發達しただけに坂が多い。

當市で有名なもの丶一つとしてはセメョノフ市場を先づ擧げねばならぬ、これは埠頭の廣場であるがこゝの一角を區切つて物々交換が開かれる、朝の八時から午後の四時まで、一年中幾千人の人々が集まつて、物々交換をするのである彼等は自分の獲得せんとする品物を相手方の幾千人の人から求めるのである。而して、自分の賣らんとする物品と交換する。

此處では貨幣が必要でない、只物を見分る眼識と交涉の上手なことが必要である。市民の階級を不問男女を不問、彼等はかくして古代な取引を始めてゐるのである、この異奇な取引は如何なる利益をもたらすかは余の存ぜぬ處であるがそこにロシヤ國民の面白い處があると思ふ。

彼等の日常生活は國家で定められた、各自の職業と一定の時間に於て勞働する他の慰安として、彼等は藝術的に生きんとして居る。藝術なき生活は野蠻なり勞働なき生活は盜賊なり

このモットーの下に生活を續けて居る。住宅の町を步いて目を引くものは彼等が如何に花を愛するの心が盛んであるかゞうかゞわれる窓棚に幾十となく花鉢を並べて居る、それは花屋の多いことゝ、花鉢の安價な事からではない、彼等が生來花を愛するのであるからである。又彼等が音樂を好む、每日午後の四時になると凡ての商店取引所及び勞働か休むのがあるが、その余暇は音樂に親しむのである

私はキプチンスカヤへ入る途中で老婆の乞食を見た。汚ない衣服髮、足等は見る人をして目をそらす程であつたが、目の見えない彼女は、實にいゝ聲で獨唱をやるのだ。人々は離れて立どまり、そしてその一つの歌を聞き惚れるのだ彼等は乞食に同情するよりも、そのメロデーにひかれるのだらう。あわれな老婆はかくして余命を唄でつないで居る。物かなしい聲があわれを人の心にそゝる、いゝ咽だなあ！私は獨りで呟やいた。

又彼等は踊る事が好きである。市の中央公園の森の中に露天の大ホールがある。二十コペックを拂ふものは自由に踊れるのである。雨を見ない夜は翌日の午前二時まで續くのでも判る。

時間空間

洋上大學歡迎デー俄然中止沙汰さもあらう、お客なしでは歡迎も出來ないでせうから

◇

歡迎者側の不注意からか、それとも先方よりのお斷りか、兎に角學生にとりては案外の事

◇

目錄を作つたのはＹＭＣＡ、徹夜で譯した歡迎文を反古にしたのは立敎ＹＭＣＡとか

◇

學界の權威を集めた汎太平洋學術會議も議院にて開催、無能陣笠連さん解散のお名殘に御拜見なされてはいかゞ

◇

火星の距離に此頃怪星ミラが輝いて居る。新城博士の話によると明治六七年頃に發した光りが今肉眼に見えて居るそうだ。

◇

陣笠さん、チト馬力をかけないと五十三光年のミラ星よりもおくれますよ

◇

豫科學生動員の燈火演習に、文科二年の學生で出席する者僅に二名これ寒心か

◇

神宮競技大會に於て、本學バスケット部は優勝し、相撲部又目覺ましい活躍振りを見せる、今後の活躍以て期すべし

決勝戰で山本四段惜敗

明治神宮柔道大會にて

第三回明治神宮體育大會の柔道大會に於て本學主將山本四段は關東の青年組を代表して日比谷音樂堂道場に出場して第一豫選に於て强敵として定評のある京都武專主將木野原四段を拂ひ腰にて倒し又大阪群馬の代表を易々として倒し愈々決勝にて近畿代表小谷と鉾を交へることになつた兩君秘術を盡して火花を散らし奮戰々々を重ね技術伯仲であつたが山本四段敵のすきに乘し足を入れる瞬間脊負投を喫し惜しくも敗る。

美術寫眞撮影

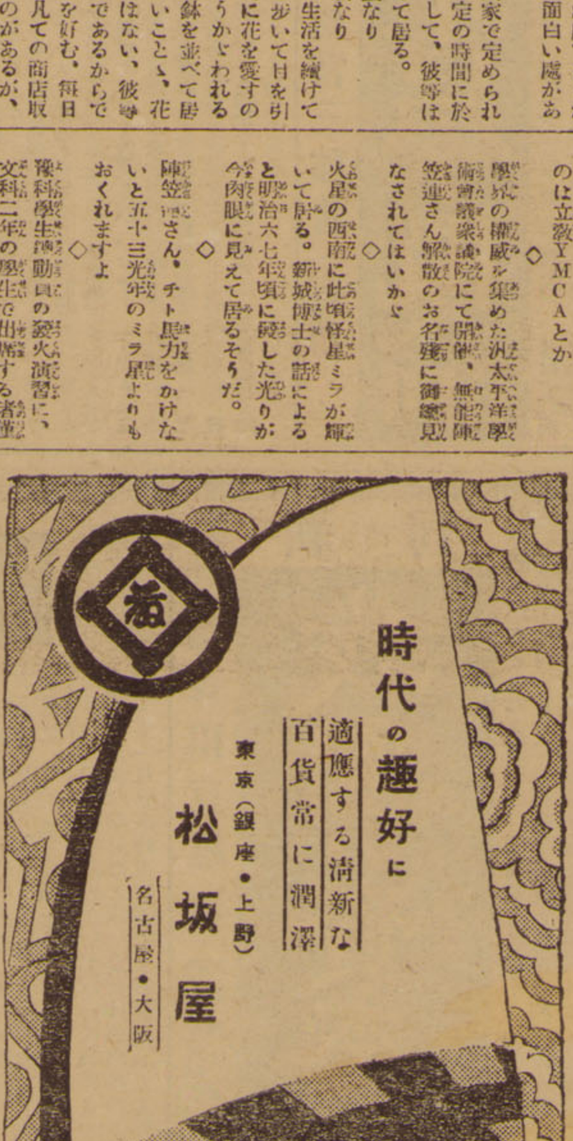
縣人會、各部送別會、其他のお集ひにも寫眞は是非河村へ御用命下さい。電話をおかけ下されば遠近に拘らずすぐ御伺ひ致します。

牛込・下谷

河村寫眞館

第一寫場　牛込區西五軒町五二（電話・牛込二二一一）

第二寫場　下谷區不忍池之端（電話・下谷四二〇八）



時代の趣好に適應する清新な百貨常に潤澤

東京（銀座・上野）　松坂屋　名古屋・大阪

學生諸君の腰巾着

文房具一式

山崎構內賣店

一度穿いたら忘れられぬ

當店の靴の心地よさ

立大構內　井村靴店

日本で一番安い店

蓄音器破格提供

ビクター四號　ビクター六號　ビクター八號　ビクター九號　ビクター五十號　ビクター百號　チニーシエラトン型　チニーオーケー號　ブランスウヰック十一號

（絕對責任保證付）

舶來五十圓より

世界の名曲レコードは何でも揃つてます

MEIKYOKUDO

歐米品専門　名曲堂　神田駿河台下　電話2443

高級ノートハイーグルニ限ル

Trade mark “EAGLE” Note Book is the best obtainable in Japan. always the finest in quality, Look for this mark when you need them.

（イーグルの商標に御注意下さい）

バチエラ・オブ・ジャーナリズム　田原春次著

宗敎新聞の研究

（定價金一圓五十錢）四六判美本　送料十二錢

新刊

本書は本邦に於ける宗敎新聞研究の嚆矢である。宗敎新聞の原理に筆を起して、世界に於ける宗敎新聞の發達史を說き、宗敎新聞記者の略傳を述べ、日本に於ても早晚起るべき宗敎新聞の經營者の爲めに新聞學の大要を說明し、卷末に英米の主要宗敎新聞の一覽表を載す。著者は多年米國に在て新聞學の研鑽に從事せる篤學の士。敢て全國の宗敎家及宗敎關係の人々に薦む。

內容　第一章　新聞根にらつゝた宗敎新聞の推移　第二章　宗敎新聞史　第三章　英米宗敎新聞創始者　第四章　宗敎新聞の機能　第五章　英國のプロテスタント派新聞史　第六章　宗敎新聞社の組織　第七章　宗敎新聞の記事の體裁　第八章　[illegible]　第九章　英米宗敎新聞一覽表

發兌　東京市京橋區宗十郎町十三番地　電話銀座三一八二　振替東京九一一四　財政經濟時報社

早稻田大學　商學部英語會では第一第二學院の英語會に提携して來る九、十兩日スコットホールに於て第一回英語聯合大會を開催すと

帝國大學　經濟學部新任講師アルフレッドアモン博士は去る三日大講堂にて經濟理論と經濟政策と題して就任講演をなした　社會科學研究會を學友會の一部として獨立せしめんとし去る二日大講堂に於て獨立期成講演會を兼ねた雄辯會を開催した

明治大學　第二雄辯部主催の下に來る七日本鄕佛敎青年會館に於て陪審制度に依る模擬裁判を開催すと　專門部の學生の主催なる三科展覽會は去る廿五日日本青年會館に於て開かれた

京都帝大　工學部建築科學生の主催の下に來る六、七兩日同敎室に於て學生の製作展覽會を催すと

新刊紹介

◇皇室と社會問題（渡邊幾治郎著）最近急激なる時勢の進步と社會組織の變革とに伴ひ社會問題は益々紛糾し、その解決は焦眉の急に迫つて居る。著者はこゝに感ずる處ありその造詣深い史學の立場よりして、民主思想、社會問題、現代社會問題の起源、貧乏問題、社會運動の發達、社會主義と社會政策、國體と民主思想、皇室と社會問題、國難と皇室、皇室の進步性、皇室と社會事業、現代社會問題と勤儉等の諸問題を提出し之を分解々釋し、社會問題は皇室によつて、のみ解決される しかも社會問題の解決によつて皇室の尊榮は增進するとの結論に達して居る、尚附錄として日露國交の回復が我社會に及ぼす影響に就いて詳述してある、發兌元東京市神田區一つ橋通町廿文泉堂、定價一圓八十錢

◇解放（十一月號）本號は學生檢擧事件批判號と題して、京大學生事件の一考察（布施辰治）狆とべロフエッサー（小林輝次）社會科學運動と無產階級運動（佐野袈裟美）の諸論文と他に杉山、山川、島中、藤森、秋田、小川、神近、山川（菊）等の思想家、文士、社會運動家等の學生運動に對する批判と感想あり、尚創作欄は武藤直治氏の戲曲（叛逆者周黎氏）松村善壽郎氏の小說（顏）神山宗勳氏の小說（殺意）井東憲氏の戲曲（船は踊る）等で賑ふて居る、解放社發行、定價五十錢

◇江原小彌太個人雜誌（十一月號）編輯方針を變じた本誌は江原研究欄の他に新聞研究欄を設けて朴念仁氏の讀賣新聞と正力島谷亮輔氏の中央地方新聞の協力を登載しあり定價二十錢

◇詩潮（第十五號）定價二十錢　發行所四谷區左門町六五

◇愛國婦人（十一月號）定價三十五錢、發行所愛國婦人社

明六日開催の全國（柔道）大會

本學主催の都下大學專門學校及び都下中等學校の第二回柔道大會は明六日午後一時より本學體育館內の道場にて擧行さるゝことになつた當日は都下大學の有段者出場して火花を散らすべく山本四段の五人拔もあり又當日の餘興として本學校友會の對部試合もありてかなり珍ゲームもあることであらうが對部試合の優勝候補としては蹴球角力兩部の何れかであるとりさたされてゐる、又可憐な中學生の紅白試合も興味を引き當日はさぞかし盛大に擧行されることであらう因に當日出場の大學專門學校左記の通り

◇早大、明大、慶大、帝大法大商大日醫大、東洋大、拓大體操高師青山商船學習院等の大學專門學校

海上大學の歡迎會 當局俄然中止を發表

裏面にまつはるいざこざ話 意外な問題を惹起するか

前號所報の如く海上大學は所謂米國式の風變りを發揮してリンダム號を根城に今や世界一週中であるが、同大學總長ロープ博士を始め一行五百數十名は昨四日午後三時横濱に入港し

『今朝』より三班に分れて各地の視察をなす事になつたが、この學に就き本學に於ても六日午後一行を迎へて全學擧つての歡迎會を開く豫定となり、殊に當日は臨時に柔道部大會をも開き遠來の客の慰めにするとの事も確定的事實となつてゐたのであるが、一昨日に至り大學當局は俄然同大學に對する歡迎會中止の旨を發表した

『大學』當局に就いて語る所を聞けば海上大學一行の日程の關係上時間の都合で止むを得ないとの事であるが、事實歡迎會の中止せらるゝに至るまでに本大學當局者に今回の學生側に於ける中心團體たる英語會基督教青年會及び國際聯盟學生支部と東京全般の歡迎主催側との間に種々なる手筈の相違を生じ再三の交渉も遂に妥協ならずしてこの結果に至つたものと見らるゝのである。

『現に』我國に於て各團體主催側協議の結果作られたる日程の中には海上大學の一行の立教訪問時間は豫定されてあり而もその同時刻に泉岳寺其他の見物時間を取られてある等の事を見ても明かに同大學のプログラムの都合のみとは見られないのであらう。これにつき本學當局は主催側に對し遺憾の意を表すと共に歡迎會中止の旨を發表したものと察せられるが今後この問題が原因して各團體間に一問題が惹起せられぬとも限らぬ形勢である

責任は何處に 悲憤の聲喧々

日程表問題は英語會聯盟が 糺彈すると意氣捲く

海上大學歡迎會中止の件に就いては種々と噂もとり〳〵であるが、明かに歡迎中央委員の手落ちなる事は明かであり

或ひ は故意とも推察せらるゝ點もあり本學內各學生團體は擧げて悲憤の際を放つてゐる有樣である、別項の如く日程表が中央委員の手に依つて作製せらるゝ折は本學よりも代表者の出席もありその協議に參加した事は事實であり乍ら、歡迎日も目睫に迫つた一昨日に至り俄然殆ど獨斷的禁止に似たる日程表を本學に向けて送附した事は完全に本學に對する侮辱であるとして

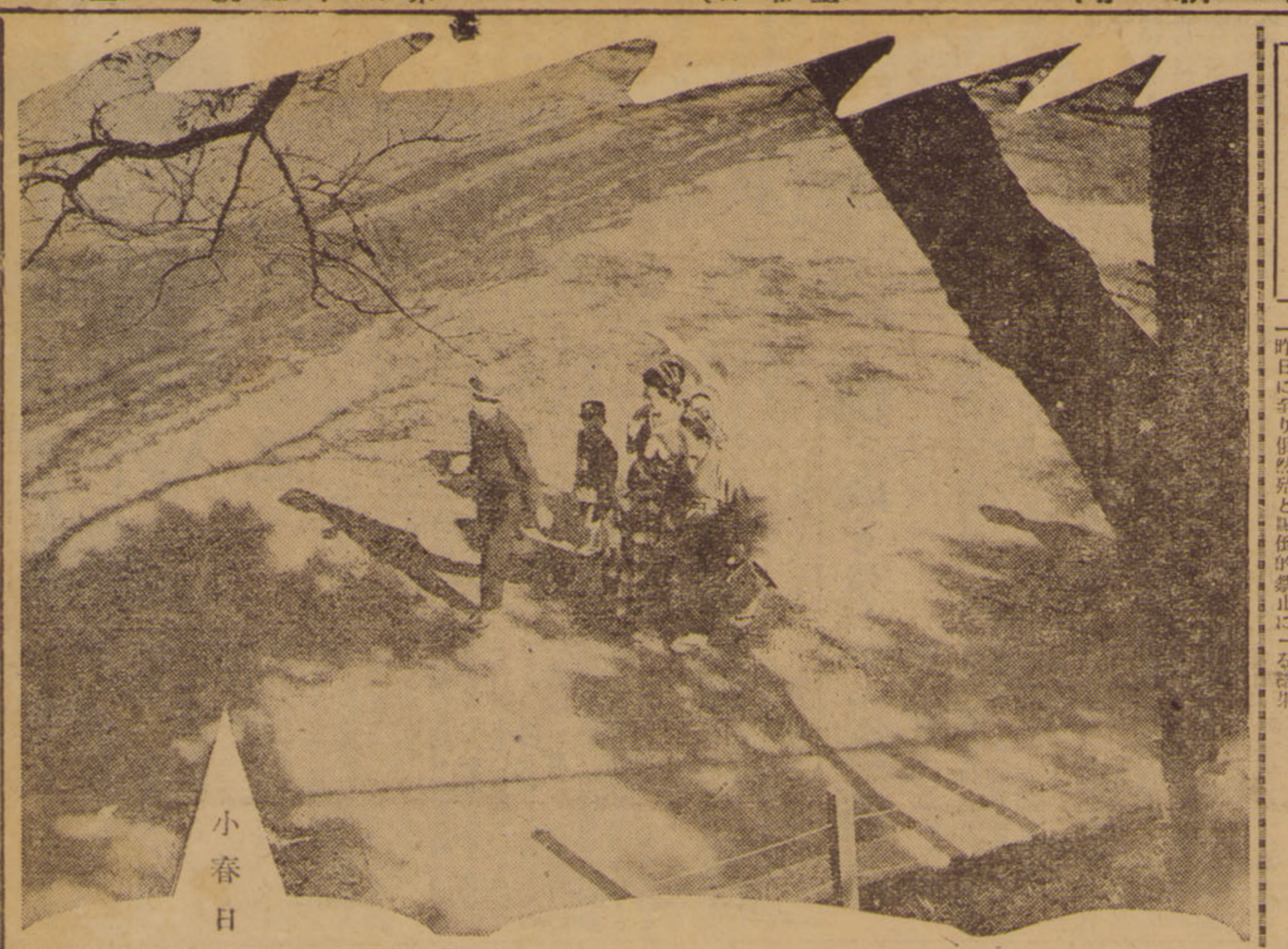
其の 責任をたゞす所があつたそれに對し徒に廻避するのみにて責任の歸する所は更に見出す事は出得ず、遂に今回の中止發表をしたわけである、本學內にあつては大學としての歡迎會を中止する事は勿論學生の主催團體とも見らるゝ英語會や國際聯盟等は其後態度決定の爲めに腐心したる結果

今回 は絶對に個人の資格にても參內役、歡迎委員等に加入せざる事を言明するに至つた。尚全國英語會聯盟も別に會合を開き本學英語會の加入反對の理由を聞き大いに主催代表の手落たる事を認め聯盟としこの態度決定の協議をなし日程問題糺彈の爲めに起つ形勢であるが各自の屬する大學との關係もありこれが聯盟加入の各會の間に面白からぬ感情をつくるのではないかと、海上大學の歡迎會の生んだ各學生團體の將來といふ問題は大に注目すべきものがある。

英語大會 期日變更

音樂部の都合にて

前號所報の如く本學英語部主催による英語大會は來る十九、二十日の兩日に亘つて、花々しく開催さるゝ豫定で準備おさ〳〵進めてゐた所當日錦上更に花を添へるべき音樂部の演奏指揮者たる和田小太郎氏の都合惡しく、到底豫定の日取りにては遂行ふ可能となつたので、一週間繰下げ來る二十六、二十七の兩日に亘つて大々的に開催されることになつた。尚內容には何等の變更は行はれない筈。



今となつて運動會とは 出來ない相談

學生大會の決議も空しく 結局來春擧行か

本紙前號にて報じた如く絶好の良季節を迎へて一部運動部委員の意向のみにて何等の具體化を見なかつた第二回運動會開催の件は、その後急激に一部から

擡頭し 去る二十七日の委員會とまでに漕ぎつけ、當日集まつた各級代表及び運動部委員並に第一回總務員の間に決行の議纏まり、更に翌二十八日午後零時より第二十四番教室に於て學生大會を開き、之が決行の件を提案し全會一致を以て大々的開催となつて通過し、いよ〳〵來る二十三日新嘗祭當日を期して躍躊きながら決行の事となつたのであるが、その後探聞する所によれば、折角の一部有志の努力も

水泡に 歸し結局元通り本年第二回の運動會は取り止めとなるより外ないと見られてゐる。

その理由としては、主として學校當局の反對意見によるものにして、豫算の不足及び時期既に遲きに過ぎるを楯として絶對に贊意を表せず、學生よりの徴收金のみにては到底開催は不可能であるからである。而してかくの如き結果となつた反面の理由は昨年第二回委員と學校當局との間に結ばれた口約の不完全にもあるらしく、結局今年に於ける第二回は右の如き理由で不決行となつたものである。

尚當局 の傳へる所によれば來年早々學校當局主催の下に大々的に開催するとのことなれば結局第二回はこれになるものと觀測されるが、斯樣な經緯からこゝにるは火を見るより明かなるに拘らず、學生大會等と一般學生を度にした一部委員の行爲は非難の的となつてゐる。

史學會例會

本月は二回

本月に於ける史學會例會は第一回十三日（土曜日）午後七時より事務所內應接室に於て『金塊集を讀みて』——大澤洋三『古風土記の地名起源の傳說』——岡田太郎、第二回二十七日時刻場所前者に同じにて『鄕土舞踊史論』——湖龍吉『尾張美濃に於ける耶蘇丹の召捕と宗門改め』——柴田亮吉

晩秋の夜を 銀線の音に……

マンドリン演奏會を 國民新聞社講堂に於て

今春編成を更改し會員の增加と共に優秀なる技倆を以て俄然斯界の注目をひきつゝある本學マンドリン倶樂部は本月七日午後二時より國民講堂に第四回演奏會を開催する事となつた。

今回は合奏曲『小英雄』マネンテ作『望まれし日』ブランツオリ作『ダンテとベアトリーツエ』ワルテル作『夜祭』マチョッキ作其他ギター獨奏にアルバ、ザルコリーの作品を、マンドリン二重奏にムニエル編曲を演奏し、學外多數の來聽を歡迎する由である。

イングラム博士 近く來朝せん

氏は英國宗教界の大立物にして現在倫敦監督たる人

英國々教會ロンドン監督として宗教界其他にブース大將と共に令名あるアーサー・フォーレー・イングラム博士は東洋旅行の途次來朝され、十一月二十九日東京着十二月五日神戸に去らるゝまで英國大使館の

賓客と して滯在、諸般の歡迎會講演會等に臨席されるはづである。同博士は英國に於ける宗教的社會指導者の權威であり、學者としての地位も既に三十餘種の著書に於て看取し得らるゝのみならず偉大なる說教家、演說家であり、過般の歐洲大戰亂に際して出征兵士の慰問其他精神的方面の施設に盡力し又其の前よりオックスフオード會館長として社會救濟に十年間奮鬪されたのである、夫等の功により英政府よりナイトに列せられヴイクトリアン・オーダーを受けられ其他母校よりD、Dを、トロント、ケムブリッヂ

兩大學 よりL・L・Dを贈られ、一八九七年、聖ポール大聖堂のカーンに就職後一九〇一年にロンドン監督となり上院議員に推された、今回の旅行は公的使命を持たない極めて自由なるものゝ由である。因に同博士來朝を機として、德川上院議長、英國大使、ブリチッシュ、ソサエティー等主催の歡迎會及大講演會を青山會館に開催の事が企畫されてゐる

尚本學 に於ても學會公會主催の歡迎會が催さるゝやにてその準備に奔走中の東京教區監督元田博士は先に歐洲巡遊の途次英國に在中、博士の斡旋により演說其他の會合に出席され大いに面目を施されイ博士の來朝に際し丁重なる謝意を本紙に寄せられた。

杉野會計顧問

―危篤を報へらる―

立教學院會計顧問杉野直浩氏は過日より病床にあつたが、四日尿毒症を併發し病勢亢進の爲め五日に至り全く絶望の狀態に陷り、本大學を代表して杉佐學生監は市外大井町一一四七の氏の自宅に急行し、病床を見舞ひ次いで總理始め杉浦教授其他大學及びミッション關係者は見舞に殺到して居る。因に同氏は古き立教の校友にして、以後學院に、職を奉ずること實に三十年、先頃本紙にて報導したる如く學院名譽評議院に推薦され、老後尚盡されんとしたるものである。尚今五日の容體は幾分持ち直したる觀あるも何分老齡のことゝて万一を氣遣はれてゐる。

切支丹渡來に 熱辯を振ふ

史學會講演會

去る卅日校友會館に於て史學會主催となり渡邊修二郎氏を招聘して切支丹渡來の概說と題して約一時間半に涉る講演會を開いた、聽衆は數十人に過ぎなかつたが皆此の方面に興味を持つ熱心な人達のみで氏の吐く熱辯の中に氏が是迄研究に獻身した努力と此の方面に腦した造詣の深さをうかゞはせた因に氏は常に海外に渡り歷史上の遺物に就いて研究し或時はベルギー博物館にその材料を集められた就中氏は我國品の海外に在る遺物に關しては非常に明るい智識の所有者である、

成功の曉近き 立教中學の市制

當局生徒の協力に 理想的市會生れん

若き生徒達に自治の精神と公德に對する責任觀念とを養成せしめる目的の下に建てられた立教中學校學校市制の內容に就いては既に報導せし如くなるも中等學校としての斯かる試みに他に類を見ざる所なるを以て周圍より好奇の眼で見られその結果に對しては多くの期待を以て迎へられて居たが、一方學校當局もこの試みを

義意 あるものとするため非常なる努力を盡し生徒間より選拔された議員を勵まして生徒に對する總風學校內各方面に涉る總理職に衛生に心を傷まして來た、その結果着々好成績を擧げる事を得て益々學校當局と生徒間の氣分の融合を見加ふるに從來の經過に徴して規則の上にもその足らざる所を補ひ理想的とも云ふべき規則の

完成 を見、何等非難の聲を聞かずして目下その成功の過程を辿り中である、總理部の主任某教授を訪ひその結果に就ての意見を問へば欣然として語る

今のはこれと云つて指摘出來る程の目新らしい仕事は見へないか當初市制を布いた當てゐた樣な充實した內容に近づきつゝある事が見へて非常に喜んでゐる、生徒もよく此の規定を理解してくれと眞面目な態度でやつて行つてくれるなら今後益々良い成績が得られると信じてゐると

教授訪問記

酒も煙草も 臭ひが嫌ひ

秋の目白に杉捷夫教授を

佛蘭西文學の教授然し、直にボオルモオランを聯想し、更に我が杉教授を聯想するは、勿論愚な事である。

我が杉教授は靜かな、篤學の新人である。無論新人であるから、學しからぬ社交性、熱、明るさ等の所有者である。教室に於ける杉氏は、極めて眞面目である。だが時として氏獨特の巧なるカイギヤクと、有益なる脱線とでもつて學生を倦かさない。

新進教授、而も篤學教授の少い我が立教に、杉氏ある事は眞に喜ぶべき事であらねばならぬ。

こんなことを思ひながら杉氏の目白の御宅を訪ふと。

『ヤア、よく訪ねて……今朝食をすましたばかりなんだ。』

聲柄のよいバリトンの響きはリズムカルである。

宏壯と云つてよい程の立派な洋館は、早稻田、牛込邊を一眸に集めて居る。

ギッシリと洋書のつまつた書棚の前を通つて階上の學窓を縫て居る書齋へ案內される。

大きなデスクの上には昨夜の名殘を含んだ數册の書籍が散らばつて居る。

『私は今日から旅行する筈になつて居ましたのですが……都合で來週まで延しました』

煙草を喫はない氏は茶菓子を無暗に食べて居る。

『酒も好きぢやありません、いやにピューリタン振る譯ですが……唯臭がきらいなので……ハ、、』

時々省線電車の響が澄み切つた空氣の中を迷ふて來る。

間數の多い爲めか他の部屋からは人聲がちつとも聞えて來ない。

氏の詩人にしては理性が勝ち過ぎて居るかと思はれるその面は、セピヤの感じがする。

飾り氣のない言葉は、緒論ガラスに眼鏡をして居る。

御自慢の佛文學に就いては巧にさけて決して觸れ樣としない『研究すれば限りがありませんよ』位か關の山である。

『最近數年に手をつけて居るのですが……いやどうも』

校正紙が本の間にはさまつて居て、藤書は黑ずんでゐる。

氏の話にはどこまでも、若い熱情がこもつてゐる。

記者はスキ腹にコーヒーを飲んだ爲めかいやに抹消神經が刺戟される。

『もう、御歸りですか』

戶外には銀色の秋が覗いてゐた

軍教彙報

……野外演習……

既報の野外發火演習は昨四日早朝一同校庭に集合後、椎名町驛より西所澤に向つて出發し驛數村に於て晝食後、兩軍に分れいよ〳〵戰鬪行軍にうつり、諸所に轉戰し銃聲物凄く灌林、栗馬附近に於て多摩川に對時し、夜間も盛に銃聲轟き大勢尚決すること出來なかつたが、雙方の戰鬪に疲れ切つた兩軍は大雨の爲め民家宿泊に移つた

今日も早朝より戰斗を開始し戰鬪行軍四里、淺川に於て演習終了し新宿驛に於て解散の豫定で、明六日は本學校庭に於て教練を行ふ事になつてゐるが四、五兩日の野外演習不參加の者も必ず六日だけは出席すべしと

火を吐く如き 熱辯又熱辯に

滿場の聽衆肺腑を抉る

辯論部生徒の公區聯合 雄辯大會盛大を極む

去る十月三十日午後一時より本學第二十四番教室に於て本學辯論部主催關東學生雄辯聯合會後援の下に、全國各大學專門學校聯合雄辯大會が開催された。參加校は遠く同志社大學、關西大學を始めとして東都三大學專門學校の殆ど全部を

網羅し この種の會合に珍しく帝大農學部實科を加へて參加校全部で十九校を算し、空前に見る盛況、聽衆又頗る多く定刻となるや議場の拍手裡に議長起つて開會の辭を述べ、愈辯論に移り先づ本學川口君は『愛國は近づけり』と題して皮切り演說をなし次いで第二早高小田島君の『宗教の招聘級性と超級性一』慶大一島君の『社會主義と實際運動』に對する卑見』等次ぐと熱烈なる懸河の辯を振ひ更に同大伊東君の『國際關爭と國際聯盟』に移つたが此の頃より野次もの凄く日大伊東君、國大三井君等の熱辯も徹底せず

轟々た る中に洋大守谷君の『プロレタリヤ文學燃燒時代來る』に入つて漸く靜まつたが同君のロシヤ文學より例を引いた三十分に亙る熱論は當日の白眉で一異彩であつた。尚本學清水君、齊藤石井君、農大仁科君、法大石村君、帝農安東君最後に慶大本田君熱論を吐き、本學襄正世君の閉會の辭を以て五時頗る盛會裡に會を閉ぢ直に池袋千代の家で委員辯士一同晩餐を共にして和氣靄々裡に解散した

帝大に 本學惜敗

七回コールド ゲームで

3—0

本學對帝大の第二回戰は去る四日午後二時四十分より御宮球場に於て藤田曾木兩氏審判本學先攻に開始

	一	二	三	四	五	六	七	
帝大	0	0	0	0	3	0	0	3
本學	0	0	0	0	0	0	0	0

第一回二死後原右翼安打す第二回本學二死後南城三壘を抜く安打に出で續く鈴木遊三匐に安打せしも遊ゴロに萬事休す第三回本學荒井中堅安打に出壘せしも後援なし第四回本學一死後山田中堅へ安打し其の逸する間に一擧三壘を占めたが南城バントを失敗して山田三壘に刺され鈴木の三ゴロに南城も封殺されてチャンスを逸す、此の回帝大二死後東の三壘打があつた第五回齋藤の安打ありしのみ帝大梅田大洞兩本四球內田四球を選んで押出しの貴重な一點を得續く土井死球で又一點（野田投手となる）野本の安打に一點計三點を得未だ得點の機會ありしも野田の好投に空し第六回兩軍無爲第七回帝大一死後土井の遊安打ありしも後援なし時あだかも驟り雨激しくなりてゲームを續行することは出來ず本學特意の後半を戰はずして審判三對零のコールドゲームを宣し帝大に敗る帝大は今シーズン最初の勝である

關西遠征の 角力部

全國學生角力大會へ

第三回明治神宮體育大會の角力部で惜しくも長蛇を逸して第二位となつた同部は昨四日午後九時四十五分東京驛發の列車にて六七兩日に亙りて堺大濱に擧行さるゝ角力大會に出場の爲め尾寄マネーヂヤ以下五名必勝の元氣にて西下したメンバー左の如し

先鋒	篠原汎
二將	高村顯
中堅	大柿光吉
副將	牛山讓男
大將	松林忠良

哲學講演會 成功に終る

去る廿五日に

本學哲學會主催本學當局後援に係る哲學講演會は豫定の如く、去る十月二十九日午後三時より第二十四番教室に於て開催された。この種の講演會に似合はず、聽衆比較的多く、講師鷲尾氏は『文明戰としての哲學』と題し約二時間に亙つて氏の年來の蘊蓄を傾倒して熱心に說き、又聽衆も魅せられた如く傾聽し、薄暮價値あるこの講演會を閉ぢた。尚同氏は現在ジャパン、アドバータイザー文藝評論記者として活躍されてゐる。

晩秋迫りて旅行繁し

晩秋いよ〳〵迫りて朝夕の冷氣は全く多くの鄕愁を思はせてゐるが寂しくなつて、あちこちの紅葉は增々よく、都人士の旅行氣分をそゝること頗る大なるものがあるがこの好季節を逸せず、本學商科三年一同は去る二日午前八時池袋驛發東上線にて、長瀞へ一日のピクニックを行つた。

又本學東西兩寮生二十名は去る三十日午前六時池袋驛發伊豆修善寺溫泉に一泊旅行を試みた、翌三十一日は數組に分れて各歸京、箱根、伊東へと蹤を盡した。尚府下在縣羣馬出身者を以て組織されてゐる在縣會にては來る七日午前七時上野驛發今紅葉眞盛りの筑波登山を企て一日の清遊をする筈である。

あずまがらす

▼先づ一つの情景を先に述べよう。

太陽が武藏野に沈んで、冷氣がぐーつと身に滲みる頃である所は池袋の某通りを、和服の着流しに靴履、無帽と云ふ少しも風態あがらない男が歩いてゐたそれだなら未だよい。寒いと云つても未だ〳〵知れたものなのに、羊毛のズボン二枚にオーバを着てゐるのである其の男が、明るい池袋の繁華な通りを歩いてゐるのを想像して下さい、路行く人々の瞳は此のエロチックな風態の男に集まつた。何と云ふ田舍臭い男だらう。然し、これ丈なら何も閱歷子は少しも氣に留める程の事もない。こゝに閱歷子はもう一つの事實を述べる話を進め

先月初旬である。突然本大學塔の下に揭示板に柔弱なる風態は立教精神に反す云々』の訓示が表はれた』其の前に學生が集を爲してゐた。

この二つの情景を結ぶ鍵を閱歷子は提供する。

其男は池袋界隈に『一番』と云ふあだ名を奉られてゐるそうである。

勿論、其男が揭示板の物語の人かどうか……。

新國劇澤田正二郎一座
初日十三日（開幕毎夕四時）
初日に限り三時開幕
トルストイ原作
島村抱月脚色
1 復活（カチューシャ）三場
復活は往年澤田、須磨子共演、カチユシヤの唄によつて津々浦々に喧傳されし新劇勃興の劃時代的名狂言。
額田六福作
2 相馬大作 七幕十一場
相馬大作は名にし負ふ南部檜山譚血と淚と劍と焰は飾られた大忠節
御觀劇料 三・五〇 二・五〇 一・五〇 一・〇〇
前賣切符御利用願上候
電話銀座七五八七 七五七六
新橋演舞場

サロメチール
運動、競技、旅行、登山による筋痛、疲勞、捻挫等に……
溫浴後本劑を輕く擦擦せしめ置くときは翌朝までにすべての筋肉及關節の疼痛消失するを見る
二十五瓦……一圓
七十五瓦……二圓五十錢
各地藥店にあり
發賣元 田邊元三郎商店 東京市日本橋區本町
田邊五兵衛商店 大阪市東區道修町
S53

美と力とへの道

武藤重勝

若き藝術家は常に革新の途を辿りつゝある。肉體の上に、精神の上に、彼の生々した情熱は新らしい美と力とを求めて止まない。雪窖にあつても常に鮮新な感情のレンズを持つ事を忘れない。街頭を歩く時も、或は窓から蒼空を眺める時も常にピチピチした感情の旗を振ふ事を忘れない。

美と力とへの道、げに若き藝術家の辿る唯一の道である。

× × × × ×

近頃の新聞、雜誌の上に散見する色毒々しき煽慾の巣。人間感情のゴミ屑。生活内容の腐敗。

哲學は何を我々に語り、創作は何を告げ、詩は何を唱つてゐるかげに恐ろしく、そして救はれないものは、獨りよがりのシエクスピアであり、若きドンジユアンである。いかに現代がシエクスピアドンヂユアンを持つ事の多い事よ情熱の火、爆發しろ！

私達は書齋に百科辭典の塵を拂ひ、いつまでも古びたペンを持つて、何を書かうとするのか。或は何を見出さうと努力するのか。現在の所謂『眞理』は焦點のはづれた硝子玉であり、でなかつたら夏の日の金魚の眼玉である。センチメンタルな煙草でもプカプカやつてゐる方がもつと氣がきいてゐる。

× × × × ×

美と力とへの道、躍進、又躍進心の戰車は常に急いでゐる。心の窓は永劫の姿に向つて開かれてゐる。新鮮な果物は途上にあふれ、血と汗の道には青春の水がさんさんと吹き零れてゐる。兩腕を高くあげて、勇ましい我々の唄を奏でよう。それ丈、我々の途は革新と希望を急いでゐる。そして藝術家の魂に常にその上を平行して走つてゐる。

× × × × ×

スポーツに、或は藝術にひたすら進むものはある。がその兩者の如何に距離の遠い事よ。まるでゴビの沙漠の感である。古代ローマの華々しき藝術的制作はないのか若々しき肉體の創造はないのか。

斷髪、スカートに露出するまろくすぐれた肢。お互ひに『原始の明るさ』へ踊りつゝある女性の肉體と感情。はぢらひは頬にのぼりその花の如きあからみは神秘の魅惑を男性にあたえつゝある。初戀と高踏的美の接吻に醉ひ、はるばると男性の航海船を見送る……。そしてそのいと華かな謎を感情と肉體にこめて悠々とスカートをけりながら、白日の時代を歩く、に見るからにして勇ましく朗かな女性……。さうした情景は我等はいくつも見る、またいくつも接觸する蒼白いスクリーンを通じて、眞四角と圓の魅力を持つた舞臺を通じて、我々はいくつかの感激と興奮を學んだ。そしてその快樂後の微醉をいかに寂しくかんじた事か。

近代的女性の魅力は痛ましい彈痕を心臟に印したに過ぎない。其の傷が生々しいだけ、今の我々にとつて最も無意識なものである。淫婦に捧げる花束だつたら、舗道に踏みにぢつて了へ。我々の心の旗を古びさしてはならない。心の鋭劍をさびさしてはならない。祖國を超え、地上超えて、新らしい眞實の凱歌を奏るものは吾々でなくてはならぬ。心臟の扉を開いてたくましい四肢の完成に若々しい魂の生誕に戰車をひたすらに急がせるものは吾々でなくてはならぬ。感傷的な詩人も、祖國の爲には戰場に立つた、花と星を唱つた若い作曲家は勇ましい行進の曲を作つた。哲學者は本を閉ぢて、重い背嚢をせほつた。『ラインを守れ』それは地上一般の若々しい約束ではなかつたが。ある人道主義者はこの情景を見て泣いて叫んだ。その聲は幾多の人民の心臟をうつたが『美と力とへの道』へ急ぐものよ。

私は言ふ、戰車を奏るものは單なる戰鬪的享樂に耽るがためでない。常に眞實を求めんがためである。美と力とを見出さんがためである。

學者達に愛されなくともいゝ、勇ましくシエクスピアの門を去らう。女性に愛されなくともいゝ。潔ぎよくドンジユアンに別れを告げよう。そして地平の彼方、美と力とに約束された道を、笛と旗とに包まれながら、ほのぼのした黎明の中をひたすらに急がう。

科學は私達の魂の支針であるかも知れない。が心の戰車に馳せるものは若々しい肉體と、精神だけである。新鮮なレンズに映るものは地平に急ぐ泪ぐましい藝術の努力の姿である。熱情の空に、無數に飛びあがる感情風船、うらうらした情景――それこそ吾々藝術を愛するものゝ幻想であらねばならぬ。戰車は強壯に、風船は新鮮な果物色に、時はまさに青春の朝だ。

『美と力とへの道』健康な途上を一散に急がう。一九二六、十一

『横っ面をはられる彼』漫評

藤掛一郎

露西亞の滲みし虚無思想の作家レオニイド、アンドレエフ晩年の作品である。筋は恐らく諸君が知つてゐると思ふから省く。こゝでは只築地小劇場の演出、效果、役者に就いて述べやう――

青山杉作氏の演出。この人は隨分役者任せの演出法をするやうだ。それは良いことではあるが一面又悪いことである。例へば自個の伎藝について自身を持てる役者は兎に角各の役を呑み込んで舞臺を知つてゐる。が所謂素人臭い、舞臺に經驗の淺い役者は舞臺と云ふ言葉に取られ過ぎて動きが取れないのである。前者は芝居をし過ぎる弊があり後者は個面白さ(?)があるが、兎に角演出者が一應しつかりした仕草なり口詞なりを與へて、それからは各自の研究を重ねるべきと思ふ。

× ×

舞臺構成、比較をすることはよくないかも知れないが、此前の純寫實主義を餘ぶ。殊にあゝ云つたものに於ては尚のことである。

× ×

役者の彼――

私はこの芝居を初日と最後の前の日と二度見た。初日の方が兎に角熱心さがあつた。緊張してやつた役者も、そして私自身もだ。

汐見洋氏。うまい。堂に入つたものである。芝居臭いの難はまぬがれないが、道化役の彼に於ける演伎は兎に角芝居臭しても關はぬと思ふ。あの劇から受ける必然の結果である。難を云へば前半、即ち頼みに來る所は巧いとは云へなかつた。部分的に云へば隨分悪い所はあるが紙數を用するから省く。あれだけの演伎をして與れゝば澤山だ。

山本安英氏のコンセイラ。氣の毒過ぎるほど氣の毒だつた。何故あの人にあの役を演らせたか解らない。他に役者がゐなかつたかも知れないが築地の苦しまぎれが伺へて殘念だつた。口詞を云ふ度に私は冷水を浴び、笑ふ度に下を向いた程だつた。これだけでコンセイラがどんなものだつたか諸君に想像が付く筈である。

瀧澤修氏のベザノ。感心出來なかつた。この人は一體に口詞を云ふ前に口を動かす癖がある。注意すべき事だ。この芝居に於ては人物を完全に出し切つて居ない。もつと巧くなつてもいゝ役者なのだが。

御橋公氏の男爵。雙手を擧げて推賞したい。實に巧かつた。顔のつくり、動き方、ほとんど完全に近い。殊に熱心にやつて與れたのは嬉しい。

東屋三郎氏の伯爵。うまい役者には違ひない。だがどうも板に付き過ぎて悪影響を及ぼして居る。殊に最大分舞臺で濫擲けてゐた。終の日にはひどい。それから惜しかつたことは第四幕コンセイラの死んだ時に手持ち無沙汰にしてゐた事だ。何とか仕草が出來なかつたものか。あれだけの技術があるのに……。

丸山定夫氏のブリケ。熱心さを買ふ。あれだけものかとも思ふ。

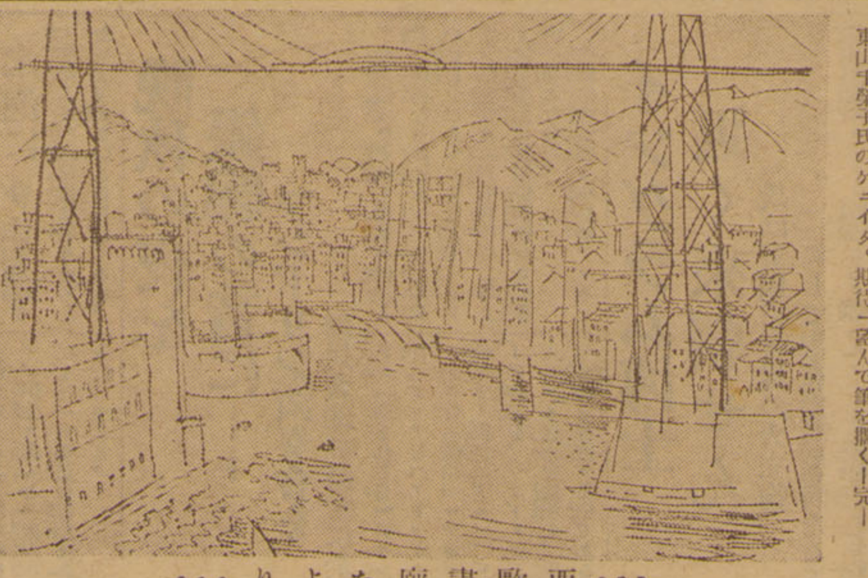
東山千榮子氏のゲニイタ。期待に反したことを喜ぶ。とても駄目だと思つてゐたが案外な出來だつた。この人の癖は口詞を云ふ度に頭を振り過ぎることである。早く直した方がいゝと思ふ。第二幕の興奮の場面はうまかつた。濃艶なメーキ、アップも出來てゐた。

外に音樂師、太陽のジヤックスン等が活躍してゐたが決してうまいとは云へない。たゞ小杉義男氏は隨分隱れた芝居をする人だと思つた。見物が解つて與れゝばいゝがと思つた。

個人に就いての印象は先づこんなものである。

× ×

終りに私は演劇の實驗室としての築地が眞面目に進んで行くことを望んで筆を擱く――完――



・・・西歐畫廊たより・・・

マルセイユ港　――オラル・デユフイ――

―連作小説―　蜃氣樓

橋本信明

『遊びにいらつしやつて下さいまし。是非。』

四ッ辻に電灯がともつてゐた。女はするりと、手を解くとそう言つた。

『では御免あそばし』

『さよなら』女は小闇に消へた。

健介は、一本道を合宿の方へてくてくと歩いてゐつた。

――何と言ふ聰明な女だらう。

健介はその言葉を胸の中で何回も繰返して丁度、大洋を汽船が航行した後の樣に、泡立つものが幾つも、幾つも殘るのを感じた。然し、不思議な事に、健介にとつてそれが女であると云ふ以外に少しも知らない事であつた。

――どんな素性？

――求めるものは遂にか、ほゝは、健介は心持肩をあげると、大きく呼吸を一つ吸ひ込んだ。

――然し何んと云ふ偶然、

――何んと云ふ……………。

空には、雲が流れて行つた。秋深くなつた風に、星が散彈の樣に散つて慄へてゐた。

× ×

二、三日過ぎて、健介はその女から手紙を受取つた。

所――園の上。一八九三。黒塀北向の赤い窓の下。三ッ時――月夜。

夜であつた。健介は窓邊に近寄つて女の部屋から赤、赤、と迫つて來る光線に打たれた。

始めてのしのびであつた。健介は窓枠に寄つてゐる彼に第一の安堵の胸を下した。

コッ、コッ、コッ、健介は硝子をたゝいた。

動悸は、其の時、又強く打ち出したが、中から女の聲がしたので直ぐに靜まつた。

第二の安堵、健介は心に計畫しでやつて來たのをこゝで取戻そうと思つた。

『少し遲くなつて』

『いゝえ、待つてゐたわ』

女はそう言ふと、健介をヴエランダに廻して錠を解いた。

女の部屋は洋室であつた。總て簡易なつくろひであつたが、天井が低いので、むーつと暑かつた。

『これですの、叔父が殘して行つたのは、お讀みになる本があつて？』女は書棚へ彼を導いた。

健介は一冊を引き拔いた。譯らなかつた。二冊目を、三冊目を手に取つた。が、失望して仕舞つた。

――獨乙語らしいぞ。

それに醫者の本らしかつた。

『あなたの叔父さんは、若しや醫者では？』

『えゝ、そうですの』女は、ほころびる樣な笑を手布で隱した。

『わたしの叔父は醫者でしたの、そしてあなたは？』

『僕は、醫者にしては少し若過ぎる樣ですが？』

『藪かき？』

此度は、健介が、笑を口唇で噛み殺した。

『そうです。』

『わたしの叔父は赤い表紙が大好きでしたの。あなたは如何？。わたしは大好きなのよ、此のシエドカバーも生前叔父からせびつて、とつてやつたの、これを掛けると氣がずんなりするのよ』

『僕も好きです。けれど僕はよりブラックが好きなんです、僕は、緑も、芝も、點景の家も、ブラックを混ぜて塗たくつて仕舞ひたい樣な景色を撮してゐる人間なんです。』

『ブラック？』女の顔は意外な面持で問返して來た。

『え、―玄黑』

『くろ』女は默頷いた。

瞬間。部屋の隅を目掛て走つたスヰッチは切られた。

『くろよ』

暗夜であつた。月影もなかつた。何所かで、地虫の聲を二人は聽いた。

沈默、そして女は靜かに言つた『わたし名字は、橘晴枝と申しますの』

健介ははつと思つた。

1　橋本信明
和田副治
田章三
吉川亘
石井雄三

感悟の如きもの襲來す

石井雄三

僕の家から一町ばかり北に七寶山蓮華寺と云ふ眞言宗の古い寺がある。伽藍の西側にある小森の樣に鬱蒼と茂つて居る老松は、多分數世紀に亘る久しい歷史を眺めて來たものであらう。原始時代のゲルマニ人は巨大な老柏に無限の神秘を感じてこれを淨化したと云ふ事であるが、僕は幼い時分からこの巨大な老松に不思議な程の強い魅力を感じて毎日々々日課の樣に樹下で遊んで居た。つまり僕の幼年期の大部分はこの老松を眺めて過したのである。或る夏の夕方の事であるが、僕は何時もの樣にこの老松の樹下で、子守りのお光にダヽをこねて居たら、鉢の黒衣に閉いた和尚が出て來て國智樣へ供へてあつた黄色の饅頭を赤いウマウマと云ひながら僕の小さい掌に載せてくれた。その頃僕はまだ四才と云ふ遙かに遠い人生の搖籃期にあつたのである。其後幾年か經たる今日、かの和尚は隱元とか云ふ數囘寺の取締り僧になつて居るが、子守りのお光は可愛そうに縁付いて間もなく難産で死んだ。

感悟の如きもの襲來す。

× ×

僕の六才の冬、それは南國には珍らしく大雪が降つた日の事であるが、五ッ違の憲太郎兄が腹膜炎で死んだ。僕には憲太郎兄の他にまだ二人の兄があつたそうであるが二人共僕がまだ人間の塊にならない時分に死んだのだから無論記憶にあらう筈がない。勿も憲太郎兄に就いての僕の記憶とても極めておぼろげなものである。祖母や祖父の話に依ると憲太郎兄は僕の樣な惡戲ッ兒と違つて非常におとなしい怜悧な子供であつたと云ふ事であるが、そんな事は僕には殆んど忘れられて居る。で只僕の知つて居る事は、憲太郎兄が毎日の樣に燒雀を食べて居た事と、それから湯で溫めた蒟蒻を腹の上へ載せて居た事位である。今から考へて見るとあの蒟蒻は解熱の爲めのものであつたらう。昨年の四月に僕が急性の腹膜炎に罹つた時、醫者が解熱の爲に蒟蒻を使ふ樣に勸めてくれた。その時僕はフト憲太郎兄の事を思ひ出した。

感悟の如きもの襲來す。

× ×

幼い時分、僕は餓飢大將であつた。僕の餓飢大將の名は恐らく村中で知らぬ者は一人もなかつたであらう。近年になつても田舍へ行くと近所の人々から『アンタハンと子供時分には非度ガイに御座んしたよ』と云ふ言葉を時々聞かされて恐縮する位である。僕はどうしたものか非常に喧嘩が好きであつた。毎日二三度づゝは必ず喧嘩をした。けれども鈴下の者と喧嘩をした事は極く稀れであつて大抵の場合は年長者が相手であつた。そうして母の話によると、どんなに負されても涙を流しながら家へ歸つた事はなかつたそうである。こう云ふ工合であつたから毎日の樣に近所から小言がやつて來て祖母と母とはその應答にホトホト困つたと云ふ事である。冬の寒い風が吹き始めると僕は毎年紙鳶を上げた。色々な遊びの中で僕は紙鳶を上げる事が一番好きであつた。雨さへ降つて居なければどんなに寒い吹雪の日でも僕は唯獨り田畝の畔へ寢轉んで朝から夕方まで空を見上げて居た。從つて僕は紙鳶を造る事とそれに繪を畫く事とは近所の同輩よりも遙かに勝れて居たのでよく加藤清正や源義家の繪を畫いては近所の仲間に紙鳶を造つてやつた事を覺えて居る。僕は小學校の四年頃から三ケ月程呼吸器病を病んだ。その時父は『寒い風に餘り當てられ過ぎた勢だ』と云つて居た。

感悟の如きもの襲來す。

× ×

僕は小學校へ通ひ出した。

受持ちのT先生は眼が凹んで神經質だつた。古い校舍は雨が漏つた新築校舍へ移つたのは二年の時であつた。僕はやはり喧嘩が好きであつた。一週間の内五日は必ず晩留を喰つた。喧嘩は好きであつたが女生徒には決して惡戲をしなかつた。仲間が女生徒をいぢめて居ると僕は女生徒の爲に大いに應援をしてやつた。T先生は僕を職員室へ引張つて行き平手で僕の右の頰を打つた。次の瞬間僕は左の頰に危險を感じたのでヒヨット頭を轉じるとT先生の手は本箱の角をしたゝか打つた。T先生は烈火の如く憤り今度は戰法を變へて僕の頭上に椅子を置いて僕の首が多少でも曲がる度びにバケツの中へ水を注ぎ込んだ。遂に水がバケツに一つぱいに滿つとT先生は何も言はずにドアーに錠を下して歸つて行つた。小使の情で僕が家へ歸つたのは晩の八時頃であつたらう。其の後僕が六年に進級して間もない頃T先生はカミソリで頸動脈を切斷して自殺をした。

感悟の如きもの襲來す。

秋の終詞

田章三

▲公園

秋の花時計に来る蜂もなく
公園のベンチに
氣永な裂ひを綴つてゐるのは
寵姫とふる陽光です

夏の夕ぐれ
このプロムナアドを
いくつ戀愛が通つて行つたらう
廣告ビラのやうに
無雜作な約束が撒きちらされて
時には
森の上の新月が
氣まり悪げに顔をそむけた
（その舞臺裝置は
表現派ではなかつたが………
………）

昨日の言葉は
捨てられた煙草の吹殻で
ひとよ
約束は不渡手形です

▲彼女

森の屏風に安心してか
（月のあがらぬ間にと………）
内氣な噴水は
しきりにシユミーズを脱いでゐる

▲記録

朝の光線が窓から浸みこんで
慇懃にも中の空氣を透明にしてゐた
素白いクッションに頬を埋めて
彼女は聖アンドレの十字架となり
受難の顛末を重い眼瞼に閉ぢてゐた
ああ　朝風に撫でられて帝政露西亜の軍艦旗は
過ぎし光榮を具に物語つてゐた

▲日曜日

秋風に刺繍されて
十字街の空を舞下る夕陽
外套の襟をたてゝ
先刻の珈琲に少し氣持がよすぎる足どりを
衣兜の中で手が調子をとる
もう此處で『さよなら』です
郊外線の電車が
あの廣告塔の下へぼくを呼んでゐます
とにかく…………
日曜日の夕方は辛いものです

上田城址

無爽山人

碧水滔々繞郭流。
飽霜紅葉蝟深秋。
登臨緬想當年事。
戰守何人貫妙籌。

小諸城址作

老木參差雅趣長。
懸崖斷壁互相望。
壯中無限好風景。
戀賞移時到夕陽。

ゆつくり打とけて飲める所
ニコニコ亭
齋藤榮助
御婚禮
御料理
仕出し
御祝儀
池袋常盤通り九〇三

―お待ちしてゐます―
小林洋服店へ
兎に角試して御覧なさい
―構内出張所で―

溫い飲み物
御外出の折は是非
ユリヤ喫茶店
豐島師範横上遠運動具店入

嶄新さと實用味を
誇る洋服は
清水洋服店
池袋常盤通旭町通

冬物の生地が
諸君を待つてゐます
着心地と堅牢本位
日の出屋洋服店
目白女子大側

米の御用は
安くて良いと
評判の高い
立大食堂御用
高田町目白上屋敷
大野屋米店

諸乾物!!
お旅行の折の鑵詰の御用は
是非當店へ
立大食堂御用
高田雜司ケ谷
石井商店

新鮮なる肉
すきやきの時節となりました
皆樣御用の折は是非!!
立大食堂御用
常盤通
岩瀬肉店
安く、良く、甘い

鮒雀燒
鰻蒲燒
佃煮類
一切
中野屋の料理で飾る食卓は！
朝に活力を增し
夕に疲勞を癒す
立教大學御用達
中野屋つくだ煮店
池袋驛西口前八五五

ライオン齒磨

祝運動會

明治屋

東京驛列車出發

	發車時刻	行先	記事
前	五・一八	熱海	
	五・五〇	神戸	
	六・〇五	横須賀	
	六・五二	下關	
	七・〇〇	横須賀	
急	七・三〇	大阪	和
	七・四〇	小田原	
	七・五〇	横須賀	
	八・二〇	熱海	
	八・五五	米原	
	九・〇五	横須賀	
特急	九・三〇	下關	一二三寢臺
特急	九・四五	下關	一二三和
	九・五五	熱海	
	一〇・〇五	横須賀	
	一〇・三五	小田原	
	一一・〇五	名古屋	
	一一・二〇	横須賀	
後	一二・一〇	熱海	
	一二・二〇	横須賀	
	一・〇〇	姫路	
	一・一〇	熱海	
	一・二〇	横須賀	
	[illegible]	横須賀	
	[illegible]	横須賀	
	[illegible]	[illegible]	
	[illegible]	[illegible]	
	四・二〇	[illegible]	
	四・三〇	横須賀	
	五・一〇	横須賀	
	五・二二	靜岡	
急	五・五〇	神戸	三和
	六・〇〇	熱海	
	六・一〇	横須賀	
	六・四八	小田原	
	六・五八	横須賀	
急	七・二〇	神戸	各等寢臺二洋
急	七・三〇	下關	寢臺二和
	七・四五	小田原	
	七・五五	横須賀	
急	八・四〇	神戸	一二等寢臺二洋
	八・五〇	横須賀	
	九・〇〇	大阪	
急	九・一五	下關	各等寢臺二洋
	九・三〇	鳥羽	寢臺二
	九・四五	小田原	
急	一〇・三〇	神戸	寢臺二和
	一〇・四〇	下關	寢臺二和
	一〇・五五	横須賀	
	一一・三〇	明石	寢臺二

上野驛列車出發

	發車時刻	行先	記事
前	五・〇〇	日光	
	五・二五	沼田	
	五・三五	仙臺	常磐線經由
	六・一〇	[illegible]	
	六・二五	水戸	
	六・四五	成田	
	六・五〇	日光	
	七・〇五	小山・新潟	
	七・二五	沼田	
	七・五〇	[illegible]・日光	
	八・〇〇	青森	常磐線經由
	八・二〇	小山・長岡	
	八・四五	成田	
	八・五五	大宮	
	九・二五	小牛田	
	九・三五	水戸	
	九・五五	沼田	
	一〇・〇五	成田	
	一〇・二五	日光	
	一〇・五〇	小山・直江津	
	一一・〇〇	仙臺	常磐線經由
	一一・四〇	仙臺	
	一一・五五	成田	
後	一二・〇五	大宮	
	一二・三〇	小山・長野	
急	一・〇〇	青森	寢臺二和（東北線經由）
	一・二〇	大宮	
	一・二五	原ノ町	
	二・〇五	[illegible]・日光	
	二・三〇	小山・横川	
	三・〇〇	大宮	
	三・一〇	成田	
	三・三〇	白河・日光	
	三・三五	富岡	
	三・五五	小山・長野	
	四・二〇	大宮	
	四・三〇	土浦	
	四・四〇	大宮	
	五・〇五	桐生	
	五・二〇	桐生	
	[illegible]	成田	
	六・〇〇	大宮	
	六・一〇	平	
	六・二〇	青森	和・東北線經由
急	六・五〇	金澤	寢臺二
	七・〇〇	[illegible]・新潟	
	七・〇〇	成田	
	七・二〇	桐生	
	八・〇五	青森	
	八・一五	水戸	
急	八・三〇	新潟	寢臺二
	八・四〇	[illegible]・新潟	
	九・〇〇	大宮	
急	九・三〇	秋田	寢臺二和
	九・四〇	[illegible]	寢臺・磐越線經由
	九・五〇	仙臺	常磐線經由
	一〇・〇五	米原	
	一〇・三〇	秋田	
急	一〇・三〇	青森	各等寢臺一二洋（常磐線經由）
	一〇・五〇	取手	
	一一・〇五	直江津	
	一一・一五	青森	

（備考　寢は寢臺にして下記數字は等級。和は和食。洋は洋食。列車等級記入なきものは二三等とす）

飯田町列車出發

	發車時刻	行先	記事
前	八・一三	名古屋	
	一〇・一三	松本	
正	一二・〇〇	松本	
後	三・〇〇	鹽尻	
	六・〇〇	甲府	
	一〇・〇〇	長野	寢臺二
	一一・三〇	長野	

新宿列車出發時刻

	發車時刻	行先	記事
前	五・三〇	松本	
	六・五八	八王子	
	八・二八	名古屋	
	九・三四	八王子	
	一〇・二八	松本	
後	一二・一五	松本	
	一・五八	八王子	
	三・一五	鹽尻	
	四・五八	八王子	
	六・二二	甲府	
	七・四六	八王子	
	九・二二	八王子	
	一〇・一五	長野	寢臺二
	一一・四五	長野	

兩國驛列車出發

	發車時刻	行先
前	五・三〇	鴨川・佐原
	六・一〇	勝浦・銚子
	六・五〇	佐原
	七・三〇	鴨川
	八・〇〇	勝浦
	八・一〇	勝浦
	八・四五	成田・銚子
	九・二〇	成田
	九・四五	鴨川
	一〇・二五	佐原・勝浦
	一一・〇〇	銚子
	一一・三〇	鴨川・成田
後	一二・五〇	勝浦・銚子
	一・四〇	鴨川
	二・二〇	佐原
	三・〇五	勝浦
	[illegible]	佐原・銚子
	[illegible]	千葉
	[illegible]	鴨川
	[illegible]	勝浦
	[illegible]	[illegible]
	[illegible]	千葉
	[illegible]	成田
	[illegible]	北條
	[illegible]	銚子
	[illegible]	勝浦・[illegible]
	[illegible]	[illegible]
	[illegible]	佐原
	[illegible]	[illegible]